

「多様なことば」へのまなざしを問う

第7回の「日本の多言語状況」で確認したように、言語というものを「ひとつ」「ふたつ」と数えられる単位としてとらえることは困難である。どのような基準をもって「ひとつの言語」と規定するのかという問題が生じるからである。

家庭ごとに食文化がちがうように、「その地域の言語」「その集団の言語」にも多様性がある。おぼろげに、地域的、集団的な共通点があることを見いだすことはできる。視点をかえれば、ちがい（個人差）を見いだすこともできる。

「言語」は、どれほど共通していて、どれほどちがいがあるか。「ひとつの言語」を定義しようとしても、どこで線を引くのかという問いにつきあたる。

「〇〇語」という呼称（名づけ）は、ある視点からカテゴリー化した「分類」であって、現実の実態ではない。共通点を見いだすことによって、きり分けられたものである。ことばは多様であるのだ。問題は、その多様なことばに人々がどのような態度、まなざしをむけているのかということだ。

「正しいことば」？

まず、規範について考えてみよう。規範とは、「〇〇は、こうあるべきだ」というものである。だれしも、自分のなかに基準がある。「〇〇は、こういうものだ」という意識をもっている。だからこそ、自分の常識から「逸脱」していると感じた場合は、「これは、まちがっている」と認識するのである。しかし、そうした態度が言語にむけられたとき、どうなるだろうか。

ここで、ジェームズ・ミルロイとレズリー・ミルロイによる『ことばの権力—規範主義と標準語についての研究』をみてみよう。ミルロイらは「「これが正しいことばづかい」だ」という類の規範的態度は、言語に対する狭隘（きょうあい）かつ不寛容に結びつきやすい」と指摘している（ミルロイ／ミルロイ1988:85）

一般の人々（すなわち標準語イデオロギーを疑問なく受け入れている人々）にとって、「文法」とは外部の権威者たちがことばの用法の上に強制的に押しつけてきた一連の「規則」のことである。この規則の大半は現に用いられている特定の用法（different to など）に対する数々の禁止令である。言語学でいう「文法」とはこれよりもはるかに広い概念である。それは外部から押しつけられた規則ではなく、もともと言語に内在する複雑にからみあった抽象的体系のことである。ネイティブ・スピーカーとはこうした文法知識を本能的に身につけている人々のことであって、この生得の知識のおかげで彼らはその言語を理解し使用することができるのである（114-115ページ）。

言語学的に言語を観察して記述された文法を記述文法という。これは、ことばの使用実態を観察して、その規則性を見いだすものである。それに対して、文学者や評論家などの言語の権威者が「つくりだし、強制する」文法のことを規範文法という。

書きことばと規範

ミルロイらが強調しているのは、言語に規範がもたらされる時、「「正しい」ことばづかいのモデルとされる」のは「書きことば」であるという点である（50ページ）。そして、「「書きことば」と「話しことば」は互いに形態も機能も異なる別次元の存在だとはいえ、前者が後者の「正しさ」のモデルと見なされることが実際にはしばしば起こっている」のが現実である（同上:106）。

ミルロイらは、「書きことば」偏重がもたらす問題について、つぎのようにのべている。

「書きことば」偏重の結果は、「話しことば」の文法構造と社会的機能に対する軽視へとつながり（「話しことば」を対象とした満足な文法書がこれまで一度も書かれたことがなかったために）、「話しことば」を「書きことば」の基準で判断するという、誤った傾向が生まれてきた（90ページ）。

言語を規範的にとらえ、あるべき姿を規定し、そうではないあり方を否定することは、規範主義であると同時に、自文化中心主義であるといえる。なぜなら、その「あるべき姿」というものは、自分の視点や多数派の視点にすぎないからである。

ことばの規範主義を強化するものとして、書きことばと言語テストをあげることができる。つまり、問題と回答を規定し、ひとつの正解をさだめる。これまでの言語教育は、そのようにして「正しいことば」を規定してきたのである。

ここで一例をあげよう。規範主義者は日本語の「ら抜き言葉」を「ことばの乱れ」だと主張する。しかし、「たべれる」「たべれない」をおかしいというのは、一面的な見方である。そこには、ふたつの問題がある。ひとつは、書きことばの規範を話しことばに適用している点であり、もうひとつは、ことばの地域差を無視している点である。自分のことばの感覚を絶対視し、そのほかの表現や用法、発音などを「まちがっている」というのは、自文化中心主義であり、非言語学的な態度である。ことばのバリエーションについて無知なだけである。

ことばのバリエーションと言語学習

ダグラス・ラミスは「イデオロギーとしての英会話」というエッセイで、つぎのようにのべている。

発音は相対的なものである。イギリスとアメリカの両方に多くの方言があり、変化があり、おのおのの国内でどれが「スタンダード」であるかは、力関係によって決められる問題である。「スタンダード」とは、つまり支配階級の言語である。同様に、フィリピンで発達したいろいろの英語が「正しくない」ということは不可能である。…中略…どちらの発音をあなたが勉強したいかを決めるのは、言語学なことではなく、政治的なことである。それはあなたが誰に話したいかという問題である（ラミス1976:24）。

英語は多様であり、地域差がある。そのため複数形で表現されることがある（Englishes）。にもかかわらず、日本で学習する場合、英語というものは「アメリカ英語」であることがほとんどである。もちろん、カナダやオーストラリアの英語であったり、イギリスの英語である場合もある。しかし、インドの英語ではないし、フィリピンの英語ではない。アフリカの英語でもない。アメリカの黒人英語でもない。なぜか。それは、英語のなかでもアメリカ英語が「つよい」という社会的背景があるからだけでなく、やはり「あなたが誰に話したいか」という選択の問題であるといえる。

英語を学習するにせよ、ほかの言語を学習するにせよ、あなたは、どの地域の言語（どのバリエーション）を学習したいのか。そして、それはなぜか。

価値づけられる言語、おとしめられる言語

英語が世界のなかで特権的な位置をえていること、国際語であるかのようにとらえられていることを問題視する議論がある。その議論では、英語を国際標準のようにとらえるのは言語帝国主義であるにとらえる。言語教育は英語に偏重すべきでないし、さまざまな場面で英語を使用しすぎている、それは問題だという議論である。

言語帝国主義として問題とされるのは、英語だけではない。場面や関係によっては、ほかの言語も言語帝国主義的に作用していることが指摘される。たとえば、ある地域が植民地支配された場合には、宗主国の言語が言語帝国主義として機能する。現在では、植民地をもたなくとも、経済力のある国の主流言語が言語帝国主義的な地位をえることがある。「言語帝国主義論の射程」という論考で糟谷啓介（かすや・けいすけ）はつぎのように指摘している。

…言語帝国主義は「もしたったひとつ言語だけが身につけられるとしたら、あなたはどの言語を選ぶか」という脅迫的な問いを話し手に投げかけつづける…中略…。もちろん、「メジャーな言語」「威信のある言語」という答えが返ってくるのはお見通しである。

近代社会における「言語の乗り換え」がけっして無垢な場の「自然な」できごとでないのは、言語を稀少な財とみなす希少性原理が「言語の乗り換え」を加速化させるからである。希少性は個人に「欠如」の意識とそれを

満たそうとする欲望を同時に生じさせる。「特定の言語—たとえば英語—が話せない」ことを、何らかの言語的欠如と感じるからこそ、ひとはみな「自発的に」支配言語を学ぼうとするのである（かすや2000:385）。

わたしは、どのような言語をまなぶのか。そして、それはなぜか。

わりきって「仕事に必要だから」といえるなら、「言語の乗り換え」の危険性はないといえるだろう。しかし、移民二世の場合、周囲は自分たちの言語（親の言語）をほとんどだれも使用していない。親は「ことばができない」から困っている。そのような状況をみて、親の言語には価値を見いだすことができず、主流言語だけを使用するようになる場合がある。親は自分たちの言語をはなしている。しかしそれは「価値のない言語」であり、「ことばができない」のと同じだと、おもってしまうわけである。言語権や継承語という理念は、どの言語も大切なものだと言主張する。

パターナリズムと言語態度

言語態度とは、言語にどのような態度をしめすかということだけでなく、ある言語の話者に、どのような態度をしめすかにも注目する。たとえば、その場で「弱者」として認知される話者に対する態度として、パターナリズムをあげることができる。

介助や介護をうけている人、あるいは「通訳をしてもらっているとみなされている人」は、周囲の人から無力化されてしまうことがある。なにも判断できず、責任をとることができない存在のようにあつかわれてしまうということだ。

たとえば、あなたの目の前に、車いすの人と、その介助者がいるとする。あなたは、どのようにコミュニケーションするだろうか。一般的な傾向について、岡原正幸（おかはら・まさゆき）はつぎのように説明している。

車椅子に乗った障害者とそれを押す介助者を視野に捉えた世間の人々は、ほとんど自動的に、一方を「運ばれる客体」、他方を「運ぶ責任主体」と定義する。そして、彼らと関わらなければならないときには、人々はもっぱら介助者の方を行為の相手を選ぶ。たとえば、障害者が自分の財布からお金を出して商品を買った場合でも、店員は介助者の方に釣銭を渡そうとすることが多い。「お店の人が、介助者にばかり説明するんですね。こっちに説明すればいいのに、こっちに説明しないで向こうでちょこちょこね。介助者のほうもそれを聞いてるんですよ。」車椅子での階段の昇降を頼まれた通行人も、「どうすればいいのかわかるのか」とか「どこを持ってばいいのかわかるのか」などの質問は、車椅子に座っている方に向けてなされることはなく、まずまちがいなく、それを押している方に向けられる（おかはら2012:212）。

このような現象を、テーヤ・オストハイダは「第三者返答」と表現している（オストハイダ2005、2011）。

自立生活をささえるという趣旨で介助をしている人にとって、このような態度に同調することはできない。そこで、障害者と接したことがほとんどないような人が障害者と直接コミュニケーションをとるように、工夫をする。

たとえば、コンビニのレジで「お弁当、あたためますか？」ときかれたとする。そのとき介助者はどうするか。

わたしは、つぎのような対応をとる。自分はこたえない。障害者がこたえるのをまつ。あるいは、障害者のほうをみる。そのことで、「判断する主体はだれか」ということを店員に明示する。そのあとは、店員は障害者に直接はなしかけられるようになる。しかし、そのようにしようと思いがけていても、じっさいには、本人が返事をするまえに、介助者がこたえてしまうこともある。

通訳を介して会話をしているときでも、「通訳をうけているとみなされている人」のほうをみずに、通訳者の顔をみて会話をすることがある。だからこそ、そのような状況をさけるために、通訳者は一歩さがって通訳をすることがある。それは、「あなたたちが会話をしているのですよ」ということを明示するためである。

まとめ

ことばはコミュニケーションに使用されるが、ことばに対する規範的な態度がコミュニケーションの邪魔をすることもある。相手に対する先入観のせいで、コミュニケーションをさけてしまうこともある。ことばは人と人をつなぐが、同時に、ことばが通じない人をおざける。ことばがナショナリズムの問題にからめとられやすいのは、ことばには結束と排除というふたつの側面があるからである。つまり、人をまとめる力と、人をとおざける力があるということである。その点をふまえて、ことばをどのように使用するのか。どのようなことばを学ぶのか。

参考文献

- あべ やすし 2010 「てがき文字へのまなざし—文字とからだの多様性をめぐって」 かどや ひでのり／あべ やすし編『識字の社会言語学』生活書院、114-158
- あべ やすし 2012 「漢字圏の手話の呼称と「規範化」の問題」 『ことばの世界』（愛知県立大学高等言語教育研究所）4号、9-21
- 石黒圭（いしぐろ・けい） 2013 『日本語は「空気」が決める—社会言語学入門』光文社新書
- 大木充（おおき・みつる）／西山教行（にしやま・のりゆき）編 2011 『マルチ言語宣言—なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』京都大学学術出版会
- 大平未央子（おおひら・みおこ） 2001 「ネイティブスピーカー再考」野呂香代子（のろ・かよこ）／山下仁（やました・ひとし）編『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』三元社、85-110
- 岡原正幸（おかはら・まさゆき） 2012 「コンフリクトへの自由—介助関係の模索」安積ほか『生の技法』生活書院、191-231
- オストハイダ、テーヤ 2005 「聞いたのはこちらなのに… 外国人と身体障害者に対する「第三者返答」をめぐって」『社会言語科学』7(2)、39-49 (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009570070>)
- オストハイダ、テーヤ 2011 「言語意識とアコモデーション—「外国人」「車いす使用者」の視座から見た「過剰適応」」山下仁（やました・ひとし）ほか編『言語意識と社会』三元社、9-36
- 糟谷啓介（かすや・けいすけ） 2000 「言語帝国主義論の射程」三浦信孝（みうら・のぶたか）／糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』藤原書店、375-386
- 金水敏（きんすい・さとし） 2003 『ヴァーチャル日本語—役割語の謎』岩波書店
- 佐藤慎二（さとう・しんじ）／ドーア根理子（どーあ・ねりこ）編 2008 『文化、ことば、教育—日本語／日本の教育の「標準」を越えて』明石書店
- 佐野直子（さの・なおこ） 2015 『社会言語学のまなざし』三元社
- 田中克彦（たなか・かつひこ） 1981 『ことばと国家』岩波新書
- 田中克彦 1993 「外国語を学ぶことの意味」『国家語をこえて』ちくま学芸文庫
- 寺沢拓敬（てらさわ・たくのり） 2014 『「なんで英語やるの?」の戦後史—《国民教育》としての英語、その伝統の成立過程』研究社
- なかの まき 2013 「だれのための「ビジネス日本語」か—言語教育教材としての「ビジネス日本語マナー教材」にみられる同化主義」『社会言語学』13号、17-41
- 中村桃子（なかむら・ももこ） 2007 『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房
- 中村桃子 2012 『女ことばと日本語』岩波新書
- ましこ・ひでのり 2014a 『ことばの政治社会学』三元社
- ましこ・ひでのり 2014b 「「言語」と「方言」—本質主義と調査倫理をめぐる方法論的整理」下地理則（しもじ・みちのり）／パトリック・ハインリッヒ編『琉球諸語の保持を目指して』ココ出版、22-75
- マッカーサー、トム 牧野武彦 監訳 2009 『英語系諸言語』三省堂
- ミルロイ、ジェームズ／レズリー・ミルロイ 青木克憲訳 1988 『ことばの権力—規範主義と標準語についての研究』南雲堂
- 安田敏朗（やすだ・としあき） 1999 『〈国語〉と〈方言〉のあいだ—言語構築の政治学』人文書院
- 安田敏朗 2006 『辞書の政治学—ことばの規範とはなにか』平凡社
- ラムス、ダグラス 斎藤靖子ほか訳 1976 『イデオロギーとしての英会話』晶文社

関連キーワード

母語の干渉：自分の言語（母語＝第一言語）とはことなる言語（異言語、第二言語）を学習し使用するとき、自分の母語の影響がでてしまうことをいう。母語の干渉は、文法、語彙（ごい）、発音、聞きとりのすべてにでる。それは、母語話者の視点からすれば不自然であるとか、まちがっているというふうに感じられる。日本語話者にとっては「ベンチ」と「ベンチ」の発音はちがうものである。しかし、日本語非母語話者のなかには、そのちがいが不明瞭に感じられる人もいる。逆に、日本語話者にとっては「n」と「ng」の発音の区別はむずかしいものである。他者の発音や文法をバカにするべきではないし、自分で卑下することもない。母語の干渉は、言語現象として、あたりまえのことである。ある言語の学習者がその言語のバリエーションを無視して母語話者のあいだに優劣をつけようとすることもある。それもまた、非言語学的な態度である。自分が学んでいるバリエーションだけが「正しい」ものと誤解しているにすぎない。

フォリナー・トーク：母語話者と非母語話者が会話するとき、母語話者があゆみよって、わかりやすくはなすことをフォリナー・トークという。そもそも、母語話者があゆみよっているのは、その人にとっての異言語をはなしている非母語話者であることを考えれば、母語話者のほうは、できるかぎり、ききとりやすく、わかりやすい話しかたを意識的にすることがもとめられるといえる。ティーチャートークとは、語学の教員が学習者にわかりやすく話すこと。

ことばの意味とは：言語学の視点からいえば、ことばの意味とは、その言語の話者のあいだで共有されているものをさす。辞書に書かれていることが「ことばの意味」ではない。あるコミュニティにおいて、どのようにその語が使用されているのかを観察し、見いだすことができるのが、その語の意味である。つまり、ことなるコミュニティではちがった意味で使用されていることもある。そのどちらかだけを「正しい」というのは言語学的な態度ではない。自分の社会的な地位や立場を利用して他者の言語使用をおとしめる人がいる。それはたんに、思いあがっているだけのことである。どのような語も、具体的な文脈のなかで発せられるものである。そのため、厳密に言えば、その語の意味は文脈ごとにことなる。そして、話し手にとっての意味と聞き手にとっての意味がズれてしまうことも、よくあることである。

文字表記の歴史：音声言語のうちのある言語を使用し、その言語の文字表記を日常的によみかきしている人は、いまある表記になれてしまっており、その表記法（正書法）が、「たまたま、今はそのようである」ということが理解できていないことがある。「わたしは、がっこうへいきました。」という墨字（すみじ）の「かなづかい」は、絶対的なものではなく、いまのルールでは、そのように書くというだけのことである。墨字の日本語表記は一般的にわかちがきをしないが、それも、たまたまのことである。日本語、タイ語、漢語（いわゆる中国語）以外のほとんどの言語は、わかちがきを導入しているが、最初からわかちがきされていたわけではない。英語にしても、わかちがきは、歴史のなかで導入されたものである。句読点や記号と同様に、みやすさ、よみやすさのために、とりいれたものである。発音はゆるやかに変化するものであるが、文字表記は大胆に改善（変更）されることがある。

コメントの紹介

差別語への規制に対し、映画や小説などの注意書きに「差別的表現があるが作品を尊重してそのまま使用している」と述べられることについて、その注意書きは作品を尊重ということだけでなく、適切な語の説明などを通して、その差別語とされる言葉が持つ暴力性と危険性、その言葉が使われていた背景などを作品から知る機会としても社会に提供できるのではないのでしょうか。例えば先日話題になった、動画ストリーミングサービスにおいて映画「風と共に去りぬ」が配信を停止し、映画の歴史の意味合いや差別的表現への批判などの説明を加えたうえで再度配信すると発表したことが挙げられると思います。また、差別用語には言い換えとしての別の言葉があることも多いですが、差別用語そのものが体現するような差別の背景、実態を知る手段として、そういった言葉が使われたときに作られた作品やその時代を描いた作品が大きな役割を果たしているという側面も大きいと思われます。個人的に、差別用語として規制される言葉の中には、映画や小説を通して初めて知った用語も多くあります。特定の人々に対しての呼称が存在し、それが差別的な意味で使用された歴史は忘れられるべきものではないと考えます。差別用語が差別的な意図で使われないようにすることと、差別用語自体の背景や歴史が語られないことはイコールでは結びつかず、むしろそういった歴史を知り、言葉の抱える意味を理解することが、負の歴史を繰り返さないための戒めとしても重要であると感じるからです。

「風と共に去りぬ」の配信について

参照：朝日新聞GLOBE (<https://www.asahi.com/articles/ASN6C2W6QN6CUHBI00J.html>)

集団に対する誹謗中傷だけでなく、特定の人に対する誹謗中傷もヘイトスピーチでしょうか。…

【あべのコメント：あるカテゴリーに属することを理由に特定の個人を誹謗中傷したり攻撃したりすることはヘイトスピーチです。個人に対する攻撃であれば、脅迫や名誉毀損などで刑事告訴することができます。集団に対する攻撃は、その点で問題化が困難だったわけです。ヘイトスピーチは、「マイノリティへの差別をあおること、尊厳を否定して侮辱すること」です。たとえば、人を批判することはヘイトスピーチではありません。政治的に賛同できない相手を批判することもヘイトスピーチではありません。要するに、ヘイトスピーチという表現を使用する目的に合致するかどうかです。ヘイトスピーチという用語は、マイノリティに対する迫害を問題化する文脈で使用されるようになったのです。】

…恋愛の対象をわざわざ公開する必要もありませんが、同性が好きなんだ、という話になったときにへえそうなんだ、と流せるくらいの世の中にはよくなって欲しいです。…

ヘイトスピーチという言葉は聞いたことがあったが、アウトティングという言葉は初めて聞いた。調べてみると、三重県の県知事がアウトティングを禁止する条例をつくるという記事を見つけた。(<https://www.chunichi.co.jp/amp/article/67324>) 自治体としてアウトティングやヘイトスピーチを禁止するという動きは、様々な背景をもつ少数者を攻撃から守る上で効果的だと思う。しかしヘイトスピーチもアウトティングも、最近生まれた問題ではない。ずっと前から社会の中に存在していたが、あまりクローズアップされることなく、見て見ぬ振りをされてきたのではないだろうか。特にアウトティングについては、今挙げた三重県の例にしても最近のもので、対策が行われ始めたのは最近のことだ。CiNiiで「アウトティング」と「ヘイトスピーチ」と調べてみた。まず大きな違いとして、論文の数が大きく違った。(アウトティングが12件、ヘイトスピーチは684件) なぜどちらも世の中にある差別の形なのにこんなにも認識の差があるのかと思うが、この事実は社会から差別がなくなる理由の一つだと感じた。差別と聞いてアメリカや南アフリカのイメージが浮かぶのは、それだけ認識されているからだと感じる。それだけ知名度があり、問題視され、解決されるべきとされてきたと言うことだ。一方でアウトティングのようになかなか対策がなされないものもある。私はもしもアウトティングに関して大きな問題が発生したら社会的に対策がなされると考えるが、そうなるまではあくまで私人間の問題であり、軽視されているのではないかと思う。(当事者たちにとってそれがどんなに大きな問題であってもだ) …

わたしはある講義で、「人種とは虚偽概念だから人種という言葉を書いたら即0点にする」とおっしゃっていた先生がいて衝撃を受けたのを覚えています。わたしはそれまで人種が存在していると思っていました。その後人種という概念は何なのかと考えるようになりました。『人種とは人間の種別的差異・種差 (specific difference) によって区分されたカテゴリー (分類範疇) のことである。つまり人種とはある考え方=見方であり事実ではない。』(<https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/000609race.html>) この言葉は広く知られるべきだと思います。人種という言葉を使うことは、差別や民族の優劣をつける風潮を助長しかねません。

過去の日本で起きたヘイトスピーチを考えたとき、私は真っ先に高校の日本史で習った関東大震災直後に起きた朝鮮人に対する虐殺を思い浮かべました。その背景には震災後の混乱から現れた「朝鮮人が武器を持って暴動を起こしている」や「朝鮮人が井戸に毒を入れている」というようなデマが広まったこと、日本人が過激な愛国教育を受けていたこと、さらには当時の日本には民族差別と女性差別が当たり前のように存在していたことがありました。しかし、この虐殺の犠牲者数など具体的な真相は政府によって隠蔽され、現在では詳細が不明になっているそうです。2017年、日本政府は当時虐殺に政府が関与した事実はないと主張しました。この虐殺は資料にもあった人種差別を民族差別として矮小化し隠された顕著な例の一つだと考えました。また、ヘイトスピーチがヘイトクライムにつながった例でもあると考えました。当時起きた虐殺の実態を正確にあぶりだし、議論を重ねることは証拠不十分のため不可能かもしれませんが、私たちはTwitterで#BlackLivesMatterとつぶやく前に自分たちの国の過去から人種差別を学び、法律の制定とは別に、自国から差別をなくすために自分たちに何ができるかを確認することが必要だと考えました。また政府も差別の実態と向き合い、事実を公表することも差別の撲滅につながるのではないかと考えました。

参照：関東大震災当時の朝鮮人虐殺についての科学的考証 <http://iina-kobe.com/entry56/>

政府によって徹底的に隠蔽された「関東大震災朝鮮人虐殺事件の真相」

<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/49733>

【あべのコメント：ヘイトスピーチの問題であるとともに、デマの問題でもありますね。災害デマはほとんど恒例のようになっています。】

…日本には少し前に比べると、外国人の方を多く見かけるようになったと思います。しかし、今でもハーフとなるとびっくりする人ばかりです。これはやはりまだまだ日本に住んでいる人はあまり外国の方とコミュニケーションをとる機会がないからであると思いました。自分の経験から話すと、アメリカに住んでいたときは、「どこの血が混ざっているの？」などほとんど聞かれることがありませんでした。なぜなら多くの方がどこか混ざっているからです。しかし、日本に引越して来て初めて会う人に必ず「どこの国のハーフなの？」と聞かれます。私自身はこの質問に関して嫌と思った事はありませんが、ハーフだからといって、英語が誰よりもできたり、キリスト教に詳しくたりと、勘違いされることに嬉しくは思いません。軽い気持ちで「キリスト教だから分かるでしょ？」と言われることを私はとても不快に思っており、差別であると感じています。この一言でこんなにも嫌な思いをするのであれば、これ以上の差別を受けている人はどんな気持ちなのだろうかと思います。そう考えているとblacklivesmatterの運動にたどり着きました。歴史を変える動きが展開していて、何もせずにはいられない人たちばかりです。しかし日本では運動を好まないし、あまり人種差別を受けた人は他の国に比べて少ないから動く人が少ないと思います。

日本には皮革業の職業差別があったということで、世界ではどうであったのか気になりました。そこで、皮革業についての論文(下記参照)によると、インドやドイツでは同じように職業差別があったということです。しかし、日本と異なる点として、西洋では皮革業の賤民集団に日本のようなヒエラルキー的な統治が存在しなかったため、職業差別が残らなかったということです。特に、イギリスは日本と大きく異なっており、皮革業を営む人々の社会的地位は上昇したということです。これは、ギルドと呼ばれる同業者組合が早期に形成されたことで、国家に対抗できる自立的で裕福なコミュニティができたからです。この日本との違いを見ることによって、人種や民族に対する差別も見出されるものであるということ強く感じました。差別は人間自身が作り出しているということ強く表している事象であると考えました。

参考論文：西村裕子(2013)「英国における皮革業の社会史：比較文化史の視点から」『駒澤大学外国語論集』

私は今まで「ヘイトスピーチ」と聞けば、南アフリカ共和国のネルソン・マンデラ大統領が黒人に対する人種差別に関することの演説を思い浮かべるが…

【あべのコメント：ヘイトスピーチの「スピーチ」は「演説」という意味ではないですよ？ free speech (言論の自由) というときのスピーチと同じ意味です。日本語でいう「スピーチ」の語感にひきづられると誤解します。】

食肉市場に対する差別の葉書などについて、この授業で初めて知りました。調べてみると、子どもが見てもわかりやすいように、食肉市場の仕事、また仕事に対する考え方について示された資料がありました。(https://www.shijou.metro.tokyo.lg.jp/syokuniku/pdf/syokuniku/images/rekisi_keihatu/leaflet_jyuhoukan12.pdf)

※文末参考記載のページより

私が無知だったのもありますが、もし見てない人がいたらぜひ見てほしいなと思いました。自分ととても関わりが強い職業であるのに、何も知らなくて恥ずかしかったです。「自分ではしたくないが、自分たちが必要としている作業をだれかにさせることで、自分たちの「純粋さ」を確保し、同時にその作業と従事者をおとしめる」とレジュメにありましたが、昔存在した「死」を穢れだと思ふ風習が影響してしまっていたのかなと思いました。自分たちが当たり前のように食べている、その食品を作る職業をしている方に、差別をするのはもちろん不当だと思いましたが、正しい理解が必要だと思いました。また、職業差別について、食肉市場の問題とは少し異なりますが、現在のコロナウイルスの問題から、医療関係者が不当な扱いを受けているという問題が思い浮かびました。よく考えればどのような行動をとるべきかわかるはずなのに、どうしてそのような差別が生まれてしまうのだらうかと思いましたが、やはり詳しい現場の事情を何も知らずいるからこそ、そのような差別をしてしまう思うので、正しい情報を得ること、そして正しい理解をすることが必要だと思いました。

【参考】東京都中央卸売市場「偏見・差別について」

<https://www.shijou.metro.tokyo.lg.jp/syokuniku/rekisi-keihatu/rekisi-keihatu-02-01/>

【あべのコメント：ほかの学生のコメントで屠場(とじょう)のことを「屠殺場」と書いている例がいくつかあったのですが、「屠殺」という表現は、あまり好まれないのですよね。動物をたべるときに「食殺」などと表現しないのに、屠畜=食肉加工をするときだけ「殺」という字で表現するのもおかしいだろうと感じます。】

屠場労働・精肉作業と被差別部落の関係について深く知りたく思い調べてみて、BBC NEWS JAPANの「【視点】日本の被差別民——隠れた階級制度」(<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-34918485>) という記事を読んだ。食肉市場での取材によると、食肉処理場には嫌がらせの手紙が届くことがよくあるようで、記事にはその中の一枚が画像で載せられていた。読んでみると、まるで食肉処理をする人たちを同じ人間としてみていないような内容で、これはインターネットの普及以前に多かったアナログな手段を用いたヘイトスピーチに当てはまると感じた。この手紙のように差別的なまなざしを向けられることが日常的にあることから、従業員は自分の職業を気軽に明かすことができないそうだ。この仕事に携わる多くの人は被差別階級をかかわりがあり、部落がそもそも人間や動物の死に関係する仕事をする人々を隔離するための場とされていた事実から現在の差別や偏見が生まれてしまっていることがわかる。そうした差別的な言動・発信にはさまざまな対策がとられ、徐々に減ってきてはいるが、これらの職業についてメディアが大衆向けに報道するのを目にするのは少ないし、そもそも職業の存在すら知らない人もいる。生き物の死に触れる仕事であってもその仕事の従事者にとっては生きるために必要不可欠なことであり、私たちもおいしいお肉を食べられるなどの恩恵を受けているのだから、職業差別は今すぐなくなるべきであると思う。そのためには、このようなタブー視がなかなか解消されない事柄についての教育が強化されるとよいと感じる。みんなが知ることがないままに差別をやめるといえるには無理があるので、個人個人が興味のあることからでも少しずつ知っていける機会が保障されることが理想であり差別・偏見の解消につながるのではないかと考えた。

…私は、4ページの「おぞましいヘイトクライムがおきてしまった。」という言葉を見た時、1年前におこった、野宿者の男性が石を投げられて殺害されてしまった事件が思い浮かびました。インターネットのニュース記事では【岐阜・ホームレス殺害事件】と題されているとおり、この事件がおこったことと、被害者がホームレスであることが、強く関係付けられて報道されているな、という印象がのこりました。警察に相談しても被害者側が「出ていけ」と言われて「行くところがないからここにいるのに」と困ってしまうケースがあったそうでした。(平成28(2016)年10月5日 産経新聞 大阪朝刊) 野宿者支援についてしらべていて、「野宿者ネットワーク」「NPO法人」というワードがでてくるなかで、このような記事を見つけました。

「ドイツでは、住居喪失を未然に防ぐためのシステムが整っている。本人や民間支援団体から住居を失う恐れがあるとの通知を受けると、自治体の専門部局がまず当事者と家主との間に立ち、滞納家賃を分割で支払えるよう取り持つ。これを家主が拒否した場合に、自治体は滞納家賃を肩代わりする。その上で、立ち退き訴訟が始まると訴訟経費なども支払うという。それでも立ち退きの決定に従わなければならない場合には、代替りの住居を斡旋する。」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/konnoharuki/20191119-00151522/>)

今までの日本の対応を見てきた私にとっては、すごく優しくおもえてびっくりしました。「住居喪失を未然に防ぐ」と、社会構造ごと変えてやろうという意気を感じられて、なんだか心がほっとしました。日本では、ホームレスとひとくくりにして深く考えるのを放棄している、「劣っているもの」を「たすけてやろう」という風向きで、だからその場しのぎになってしまうのでは？と思います。安易に比較するのはよくないことと思いますが、なんだ、ボランティアさんが無理をしなくても、国とお金の力をつかっても、こんなふうの実現できるんじゃない、と安心しました。個人個人の家を失う事情を考えると、深く考える風潮が広まって、大きな力になってほしいと思います。

今回の授業で引用されていた「表現の機会は決してすべての人々に開かれているわけではなく」(湯浅1997:268-269)の部分が印象に残った。また、自身で調べた論文に『ヘイト・スピーチが奪うのは、まさに、「公共空間」へ己の身体性を晒すことへの安心感、勇気、自信、安全性ということになるだろう。言い換えれば、「言論の自由」の前提条件である「公共空間」への参加そのものが脅かされているのだ。』と書かれており、ヘイト・スピーチはマイノリティ側から表現の機会を奪うものだといえる。そう考えると、他人から表現の機会を奪うヘイト・スピーチが表現の自由を笠に着て自身の正当性をアピールするのはおかしいのではないだろうか。また、ヘイト・スピーチが街中やネット上で平然と行われてしまうことは、それを行う人物がマジョリティ側であり、社会において正当性があると認められているためだと思う。もしも、マイノリティ側が同じように主張を行うならばマジョリティ側に弾圧されてしまう危険性があるからである。そういった面においても、マジョリティ側は表現の機会を認められ、マジョリティ側には認められないといった事態を引き起こしていると思う。

参考：青木克仁「ヘイト・スピーチと言論の自由」

https://yasuda-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=481&file_id=22&file_no=1

…私が今まで生きてきた中では、ハーフの人を差別する風潮に出会ったことはない。むしろ、ハーフ=きれいな人・複数の言語話者である人が多いというイメージから、羨ましいと考える人も少なくないと感じる。…

【あべのコメント：錯覚です。サンドラ・ヘフェリン『ハーフが美人なんて妄想ですから！！』を読むといいでしょう。】

講義の中で「混血」と「日本人」という本が紹介されていましたが、ハーフやダブル、ミックスなどの呼称の使い方も大きな課題である思いました。私は母親が外国人であり、父親が日本人であるため二つの国の血が混ざっています。幼い頃から、周りの人達から「ハーフ？」などと言われてきた為、私自身「ハーフ」と言われる事に何も感じていなかったのですが、外国では混血の人に対してハーフと呼ぶことは決して無いそうです。また、父に聞いたのですが、私の母親は私が周りからハーフなどの言葉を掛けられる事を良く思っていなかったそうです。確かにハーフは半分という意味を持ち、半分だけしか日本人でないとかネガティブな意味で捉える人も多いかもかもしれません。(実際に、ハーフという用語を使っている人達は、その人が半分〇〇人であるとか深く考えずに用いる人がほとんどだと思います。)

個人的には、「あいのこ」や「混血児」という言葉には不快感を感じます。国や人によっても、差別している気がなく使っている言葉が、差別用語として相手に捉えられてしまう複雑性があるのは非常に難しい問題であると思いました。私達は、自分が何気なく用いている言葉が場合によっては差別に繋がるかもしれない事を心に刻んでおく事が差別を減らす一歩になるのでは無いかと思います。

…今日の日本において差別問題を扱う上で課題となるのは、「自国で起きている様々な差別を差別だと認識できていない」ことだと思います。…

…黒人差別だって、アイヌ民族に対する差別だって、してはいけないことってことはわかっているけど、アイヌ民族に関しては特に知識が少ないから自分は何気なく発言したことでアイヌ民族の人々にとっては傷ついたり、差別されていると感ずる可能性が否めない。自分が差別的発言をしていることに気が付かないっていうのが一番怖いと思う。

【あべのコメント：典型例が「日本は単一民族の国」という発言です。完全な事実誤認なわけですが、とても攻撃的な意味をもちます。アイヌ民族の存在を否定する発言なのですから。】

私はこの授業で、身近に感じないからコメントに困る、興味がわからないから掘り下げてみようと思えない、ということが多かったように思う。差別の問題は規模が大きくて当事者ではない傍観者のような立場で差別問題を考えていた。マイノリティについて理解し自分がどういう態度をとるべきかを考えるには、その立場のほうがわかりやすいと思う。しかし、SNSを使っている自分にとって差別問題は身近なことではない。容易に加害者にもなれる立場にある。だからこそSNS上で議論されている昨今の社会問題から、どうにか自分が意識できることを考えていかなければいけない。少し前の「#検察庁法改正案に抗議します」運動での差別を取り上げる。数多くの著名人がTwitterに投稿していたが、私は影響力のある人たちが政治的な発言をすることは、国民がより政治に興味関心をもち理解を深める手助けになるのでいい動きだと思った。しかし、芸能人だから、歌手だから、知らないかもしれないけど、と差別的発言を受け、リプライ欄でも議論が激化し、ツイートを削除することにした方もいた。芸能人だからとかもうそれ自体が差別だと思う。政治性の強いミュージシャンも賛否の声を受けることがあるが、そもそも音楽という表現ツールを使って自分の意見を表明しているだけなので誹謗中傷の標的となる意味が分からない。またこれで著名人がより一層政治的発言をしにくくなったとしたら差別が拡大するだけだと思う。一般の人と芸能人で何が違うのだろう。私も「○○にはわからないかもしれないけど」「○○のくせに」と言ってしまうことがある。悪気がなくても差別的な発言をしてしまうことに注意したい。

5月11日、私の地元、四日市のナンバープレートの交付が開始されました。地元の名が入ったナンバープレートが交付されることは素直にうれしかったし、私も四日市ナンバーの車に乗りたいと思いました。今の時代、SNSなどで手軽に色々な地域の人々の意見を知ることができますし、ツイッターで四日市ナンバーについて検索をかけてみたのですが、そこにはヘイトスピーチ、差別的と言わざるをえない発言が多くありました。例示するのもおぞましいのですが、『走る公害広告塔』、「(四日市ナンバーを付けた車から)明確に環境への悪さを感じられる」といった、四日市ぜんそくを持ち出した根拠なき言葉が散見されました。これまで、遠方の他都府県の人に出身地を伝えると、「社会で習ったから名前知ってる。公害があったとこだよね。」と言われることはしばしばありました。公害問題が起こったことは事実であるので、このような言葉がヘイトだとか差別的だとは決して思いません。しかし、先に述べた、地域の名称から公害問題を想起し、心無い書き込みをすることは、現在四日市に居住する人に対する侮辱であり、部落差別の延長であると思います。…

【あべのコメント：工場があるから公害が発生したのですから、公害がおきたことをもって差別するのは、かなりひどい話ですよ。工場を必要としない人はいないわけで。周辺住民や労働者に健康被害があってはならないという意味で公害問題はきちんと継承し、改善していく必要がありますが、差別するのは最低。】

私のアルバイト先は大型ショッピングモールの中に入っている服屋さんです。その大型ショッピングモールの掲示板に、「なくそう！ヘイトスピーチ！」と書かれたポスターが貼ってあります。いつも出勤するとき目に入るので、なぜここにこのようなポスターが掲示されているのだろう、そもそもヘイトスピーチってなんだろう、となんとなく気にはなっていました。…

【あべのコメント：法務省作成の黄色のポスター「ヘイトスピーチ、許さない。」はあちこちで掲示されています。】

差別問題やヘイトスピーチは攻撃的行動だが保守的行動ともいえると思う。マイノリティを攻撃することによって、自らの所属している集団を肯定し、自分の居場所を守ろうとする心理が隠れていると思う。ハチの巣のようにその巣(集団)の中にたくさんのハチ(人)がいて、他の巣からやってきた違う種類のハチを、ハチの巣を駆除する人間のようにとらえてしまっているから攻撃してしまう。人種や民族という概念は、政治や経済、文化を理解する点では便利なものであるが、それが差別やヘイトを生むこともあるということを常に考えておかなければならない。

【あべのコメント：自分が問題視している社会の状況について、だれかをスケープゴートにして、その人たちをせめることで解消しようとするという特徴もあります。】

…中学生の時、家庭科の授業で障がいのある方を「害」という字に悪いイメージがあり、不快感を訴える人がいたことから「障がい者」と表記するようになったと習った。なので文章ではできるだけ「障がい者」と表記するようにしている。しかし、ニュース報道やこの授業の資料でも「障害者」という表記がなされており、疑問に思ったので調べてみるとこれは公的に定められたものではないようだ。それぞれ人の見解や考え方の違いによって表記も変わってくる。

NHKの調査によると

機能障害を持つ人の社会的な不利は社会のバリア（障壁）によって生じるものであり、その点を象徴する表記として「障害」を変える必要はない

という意見があった。こういった捉え方もあるのかと驚いた。それでもこれは障がいを持つ人にとっての総意ではないだろうし、「障害」が自分たちのことを指していると考える人も多いただろう。議論はまだまだされるべきだと思う。また、表記が変わっていることで我々の意識がすぐに変化することはできないと思うが、こういった議論があることを知り、自分の考えをもって意識的に言葉を選ぶことが大事だと感じた。

参考：https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/pdf/20200401_3.pdf（障害の表記について—NHK）
<https://tryze.biz/media/column/word-difference/>（「障害者」「障がい者」「障害者」どれが正しい？漢字の意味の違い—TRYZE MEDIA）

【あべのコメント：わたしは障害者団体で仕事をしていますが、障害当事者のスタッフ（代表、所長をふくむ）は、みなさん障害者と表記しています。問うべきはそんなこと（「害」か「がい」か「碍」か）ではないだろうという意見です。】

…かなり以前に建てられた精神科の病院や、入所施設は市街地から離れた場所に多いようだ。また、新たに施設を建設しようとする、地域の反対にあたりもした。これより、社会全体が精神的障害者を自分の生活から引き離したいと考えていると言えると思った。

【あべのコメント：いろんなところに分離主義があります。裕福な家庭では私立学校に子どもを入れる。家賃が高いところに住んでいるから「貧乏な人」は近所にいない、など。】

2016年に起きた相模原障害者施設殺傷事件は、被告がその施設の元職員であったことに注目しなければならない。施設職員として障がい者に寄り添ってきたはずの人間がなぜ、障害者の殺傷に至ってしまったのか。福祉を学ぶ人間として、障がい者への偏見や差別をなくすためには、障がい者と積極的に接し、障がいについて理解することが必要だと考えてきたのだが、この事件はそんな考え方を根本から覆した。被告は施設職員として障がい者とともに過ごしたことによって、障がい者への理解が深まるどころか、その理解は間違った方向へ向いてしまった。一つの施設という共同体の内部、言い換えれば「身内・味方」ともいえる中でヘイトクライムが起こってしまったことが問題であると考えている。相手をよく理解することは多文化社会ではとても重要である一方、それが結果的に負の方向に働いてしまう可能性があることを留意しなければならない。さらに、被告の言葉や思想に賛同する人々が少なからず登場したように、ヘイトクライムは次のヘイトクライムを呼び寄せるものであると思った。

以前、私の好きな韓国のアイドルグループのメンバーが、韓国では有名な歌手であるノラ조（ノラジョ）という方たちのカレ（カレー）という曲を口ずさんだことが海外のファンの間で少し問題になりました。その曲の何が問題だったのかが気になり調べてみたところ、文化や宗教的なことを面白おかしく表現しているような歌詞や、mv上で顔を茶色に塗っていたことが差別的であると問題になったようでした。このことについて、海外の方たちは、良くないことだと反応する人が多い中、韓国では反応する人はほとんどいませんでした。そもそもこの曲が出る時に問題なしという判断で音源が発表されたという時点で、韓国ではこれが差別的であるという認識はなかったのかなと思います。なので韓国の方たちはこの曲をただの楽しい曲として捉えているだけで、問題視される意味が分からないという方たちがほとんどでした。また、中には「彼らは韓国のグループなので外国の文化を守る必要はない。」と意見する人もいました。もちろん個人個人が表現の自由を保障される権利はあると思いますが、それによってどこかで傷つく人がいるかもしれないという事を意識することも大事なのではないかと思います。この件で一般人も勿論ですが特にアイドルや芸能人といったメディアに登場し、多文化多民族の間で活動する人達はこういった問題に敏感になっていく必要があると思いました。

【あべのコメント：Kポップなど、韓国の文化コンテンツが国際的に人気をアツめるようになり、韓国国内では通用していた表現も、海外の視点で批評されるようになったわけですね。「カレー」という曲は、ステレオタイプな描写でインド文化を茶化していて、典型的な「misrepresentation」（誤った表象）になっています。】

差別的な言葉は使ってはいけない、という認識は多くの人が持っていて、ヘイトスピーチが良くないものだという社会が次第にできてきたのだと思います。ただ、動画内にもあった通り、「文脈」によってはそうした言葉を使わなくても差別的な表現をすることはできてしまう事実と、逆に差別的な言葉を使って許される場面も（極々稀に）あると考えています。その場面の例としては、文学作品の分析や翻訳などの場面です。差別的な言葉を一括りに使用禁止にするのは簡単ですが、作品の中でその言葉が使われていたという事実を捉えるべき作品分析・翻訳において、現代の基準に合わせて、「つんぼの（聴覚障害を持った）登場人物」のことを「耳の聞こえない〇〇」と言い換えるのはむしろ不適切だと思うのです。最近遭遇したケースがまさにこの例で、近代外国文学を分析・翻訳する機会があったのですが、「文脈」を考えた結果、差別的な言葉が双方の言語にあったことを示すためにも「つんぼ」という言葉を使って説明しました（注釈はつけましたが）。…

【あべのコメント：逆のパターンもありますね。積極的な意味で大文字で「Deaf」と書いてある英語の文章を日本語に訳すとき、「聴覚障害者」と訳してしまっている場合があります。これは「ろう者」と訳するのが正解なのですが、「Deaf Culture（ろう文化）」に関する当事者（Deaf people／ろう者）の議論を把握していないと、わからないのですよね。】

私は、レイシズムと聞くと、まず黒人差別を思い浮かべ、国内の民族差別をすぐに思い浮かべるということは少ない。また、アイヌ民族に対する差別という言葉は今まで何度も耳にしてきたが、実際どのような差別が存在するのかは知らなかったのを調べてみた。まず2016年に内閣府によって行われた調査によると、現在のアイヌへの差別・偏見について、回答者がアイヌの人々の場合、72.1%が「あると思う」と答えたのに対し、国民全体を対象とした場合「あると思う」と答えた人は17.9%しかいなかった。この時点で日本国民のアイヌ人差別に対する認識の低さがわかる。また、どのような差別が存在するのか調べてみると、職場や学校、交際・結婚など身近な場面に多く見られた。…

〈参考URL〉アイヌ差別の現状——民族への差別と民族の内なる差別

<https://synodos.jp/society/21668>

「国民のアイヌに対する理解度についての意識調査」

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/ainusuishin/pdf/rikaido_houkoku160322.pdf

今回の配付資料で禁句集や言い換え集について触れられていたので差別表現について調べてみました。インターネットで「人種差別用語」と検索すると、Apple社が「Black Lives Matter」運動を受けてプログラミングの世界で使われてきていた「Blacklist/Whitelist」などの人種差別的な用語の使用の禁止を発表したというネット記事が見つかりました。確認の為にApple社のホームページを見ると、「Blacklist/Whitelist」は「deny list/allow list」等に言い換えると書かれていました（blacklist/whitelist (n., v.) Don't use. Instead, use an alternative that's appropriate to the context, such as deny list/allow list or unapproved list/approved list.）（参考ページ：<https://help.apple.com/applestyleguide/#/apsg1a3a0436>）ブラックリストという用語は聞き慣れている用語なので、専門的な分野でも差別的な用語が使われていることに気づきました。日常生活の中に浸透してしまっている差別用語を減らしていくことが重要だと感じました。

…昔のヘイトスピーチは手紙や電話だったのに対し現在はSNSの普及により匿名性が増し、ヘイトスピーチをしやすい環境になったのではないだろうか。

【あべのコメント：そうではありません。黒電話の時代は逆探知でもしないかぎり個人が特定できなかったのに対して、デジタル時代の現代は容易に発信者を特定することができます。SNSの匿名性というのは、あくまで表面的なものです。手軽さに「しやすい」と、これまでは放置されがちただけのことで、今後は発信者が特定されていくでしょう。被害を申告するだけで特定できるようになるでしょうから。】

第15回とテストについての連絡：

第15回（8月21日）は、ふりかえりの授業をします。8月14日はやすみです。テストは、ユニパを通じて提出してもらいます。事前に公開した複数の問題について解答するという形式です。8月22日から提出できるように設定します。提出できる期間は8月22日のみです（0:00から23:59）。万が一おくれた場合は、テストの解答をメールで提出すること。さらに、もうひとつ課題をだすので、そちらも提出すること。

テスト問題について（今回提示する問題だけでなく、あわせて6問程度の予定）：

問題1：〇〇市在住のAさん（非日本語話者）が妊娠しました。日本での出産、育児についての情報がほしいと思っています。あなたなら、どんな情報提供しますか。多言語の情報がどこにあるかなどについて、具体的に機関名などをあげながら簡単に説明してください。かならず、〇〇市（あるいは区など、なんらかの自治体）がどこかを自分で指定して説明すること（実在する情報を書くこと）。感謝されるレベルのものを用意してください。やつつけ回答ではダメ。200字から300字程度。

問題2：新型コロナウイルスに関連して、多言語情報／ことばのバリアフリーという観点から重要だと思われる情報について、ひとつ紹介してください。日本のものでなくてもいい。その情報のポイントについても簡単に説明してください。この授業で既出のものはダメ（tabunka2020、学生コメントをふくむ）。解答は、発信主体「題」URL、その内容

※解答例：

厚生労働省「外国人の皆さんへ（新型コロナウイルス感染症に関する情報）」 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/jigyounushi/page11_00001.html

さまざまな支援制度、労働基準法の内容などについて、やさしい日本語と多言語で解説している。

問題3：この授業の内容に関連する動画をひとつ紹介してください。違法アップロードされたものはダメ。公式チャンネルのもの、TEDやYouTubeなど、無料で視聴できるものをえらんでください。

解答は、動画の題とURL

- ・ ひきつづきテスト問題を募集します。
- ・ 正解主義的なテスト問題の提案がよくありますが、そういうものは基本的な知識を問う問題にしてください。議論の余地があるものについて「正解」を問うようなテスト問題はふさわしくありません。
- ・ 解答は、自分独自のものにしてください。ほかの学生とおなじ内容を書いてもダメ。
- ・ 直前（前日）に提示する問題もあるのでテストまでに、これまでの配布資料、動画資料、写真資料を復習してください。